

福津の歴史（手光波切不動古墳の調査成果）

福津市教育委員会 井浦 一

はじめに

手光波切不動古墳は、江戸時代の終わり頃に編纂された『筑前国続風土記拾遺』に記録があり、石材の大きさなどが記されています。その末尾に「近年窟中に不動を安じて岩窟不動と云」とあることから、この頃に不動窟となつたことが窺えます。残念ながら石室開口の時期や出土品については記述がありません。

古墳周辺は宅地化が進み、古墳の詳細な規模や形状等を示す資料のないまま墳丘の裾部分と周囲の旧地形が失われています。平成4年に福間町教育委員会により石室実測が行われ、同年に町指定の史跡となりました。その後、平成17年に福間町と津屋崎町の合併により福津市が誕生し、本古墳は市指定の史跡となっています。

このような経緯の中、福津市教育委員会では本古墳保護のための基礎

繩文時代は土器や石器が出土していますが、住居など明確な遺構を確認していません。弥生時代になると水稻耕作の開始と普及を背景に河川周辺で集落が多く営まれ始めます。手光今川河口付近に位置する今川遺跡では、環濠とみられるV字溝、遼寧式銅劍を再加工したとされる銅鏃と銅鑿が出土し、弥生時代前期における朝鮮半島文物の伝来を示す全国的に著名な事例として知られています。

資料作成を目的とした調査を進めるところとしました。平成22年度は墳丘および周辺地形の測量図作成を、平成23年度は古墳規模の確認調査を実施しました。小規模な調査であったにも関わらず、石室周辺において副葬品とみられる遺物が次々と発見されました。本稿では近年思わぬ出土遺物を得た本古墳の発掘調査成果について紹介致します。

（図2）

古墳時代、市内の丘陵や台地上に

古墳500基以上が確認されています。集落遺跡も多く見られます。これららの遺跡では、中国大陸・朝鮮半島の影響を窺わせるものがしばしば出土し、当地域がいち早く先進文物を受容したことを窺わせます。また、

古墳時代中頃から市北部の玄界灘に面した丘陵や台地上に全長100mを超える大型の前方後円墳を含む古墳群が築造されます。これらの古墳群を津屋崎古墳群と総称しており、

一・位置と歴史的環境

本古墳は、福岡県福津市手光に所存します。宮地嶽山麓からさらに南側へ広がる丘陵の先端標高22～27mに位置します（図3、写真2）。本古墳の西には手光今川中下流の低地が広がり、発掘調査によつて多くの遺跡が知られるようになつてきました。

旧石器時代については黒曜石製のナイフ形石器が出土し、一万年以上前の年代が推定されています（図1）。

本古墳の近辺を見てみると、宮地嶽古墳、手光古墳群といつた多数の古墳が分布しています。本古墳の北



写真1 蛇行鉄器

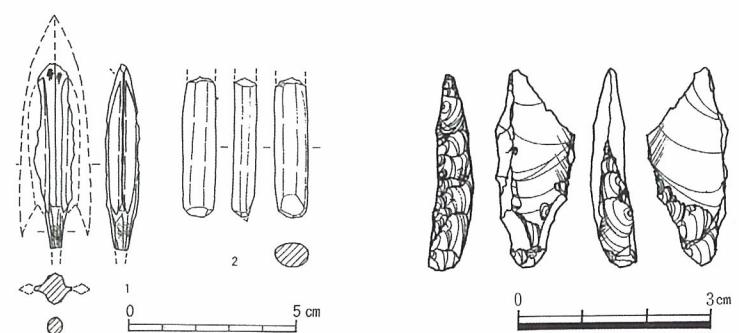


図2 今川遺跡の青銅器

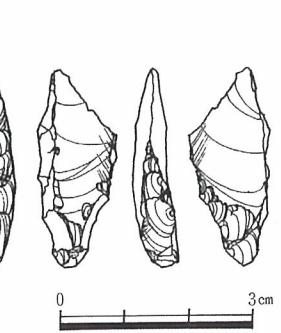


図1 手光出土の旧石器

西1.5kmに宮地嶽古墳があります。

二、調査の経過

【平成22年度】墳丘測量

墳の位置付けを検討する上で重要な古墳です。

手光古墳群は丘陵上に総数30基以上が確認され、南支群2号墳では希少な舶来品である蛇行鉄器が出土し、当地域の対外交流を物語る遺物として知られています(写真1)。

墳丘と周辺において現況の平板測量を実施しました(写真3)。等高線の実測は急傾斜のため作業困難であり、多くの作業時間を要しました。

なお、測量作業の際に墳丘頂部に玉砂利が多くあることを確認し、12世紀の青磁皿を表面採集しました。

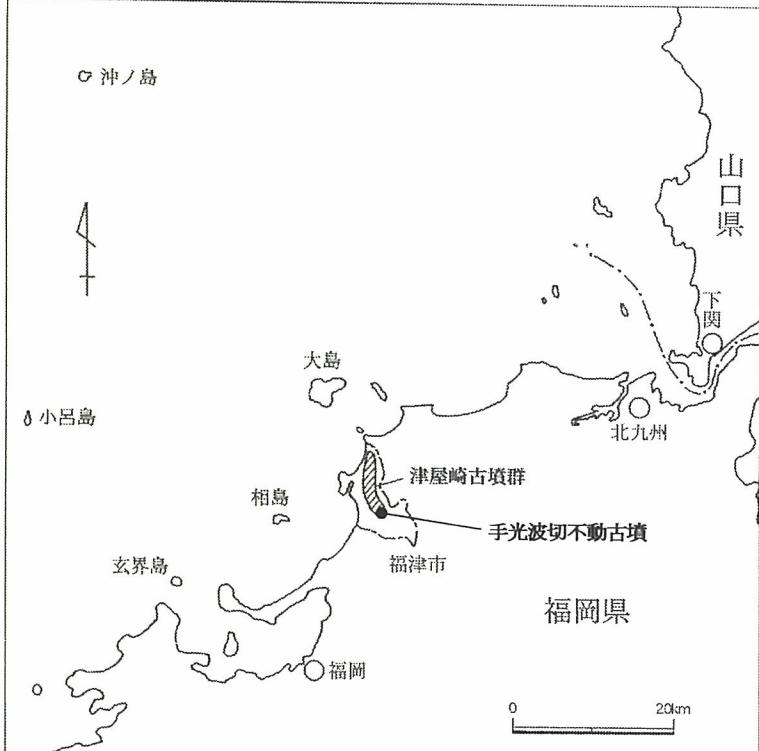


図3 手光波切不動古墳の位置



写真2 津屋崎古墳群全景航空写真(南西上空から)

【平成23年度】範囲確認調査

条件の整った石室開口部付近の土地において幅80cmのトレンチ（溝掘り）調査を実施しました。掘削した土はフリイ選別により細かく割れた遺物が含まれないか入念に調べました。トレンチ調査では、石室につながる通路である墓道の一部を新たに確認しました。

三、調査成果

1 古墳の規模

現状の墳形は円墳状で、規模は直径20m、高さ9mです（写真4）。方墳の可能性も検討しましたが、墳丘頂部に玉砂利が散らばり12世紀の青磁を表面採集したことから、後世の墳丘利用による変形を考慮する必要があります。トレンチ調査では墳丘規模に關わる遺構は検出しませんでした。本古墳は周囲を明らかに削られています。墳丘測量図を検討した結果、現時点では円墳で直径が25m前後だらうと推定しています（図4）。

2 埋葬施設

墳丘内部に造られた埋葬施設は内部の奥行き10・8mの横穴式石室で

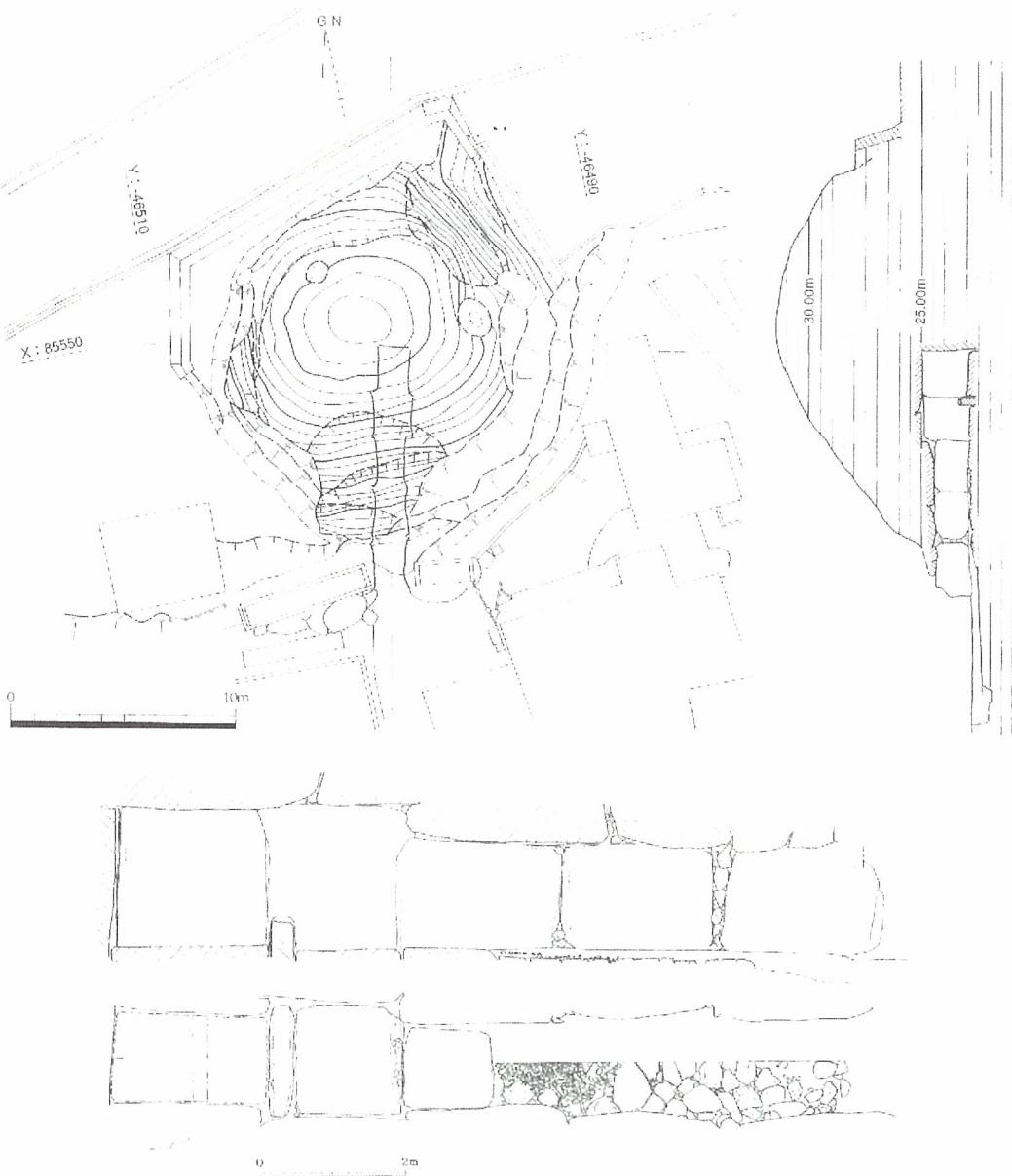


図4 手光波切不動古墳 墳丘測量図及び石室実測図

す（写真5）。羨道という通路を奥に進むと玄室に至ります。玄室を二分する仕切石があり、この部分が不動尊の祭壇となっています。玄室の仕切石から奥はやや幅が狭くなり独立した埋葬空間に見えます。仕切石の上面の中央には浅い凹みがあり、

玄武岩です。玄室と羨道の一部に板状の一枚石による床石があります。ここまで石室構造を詳細に説明しましたが、本古墳のように床石を備え玄室幅が奥で狭まる構造は、九州では通常造られない特異なものです。

一方で仕切石に見られる浅い凹みは祭壇の一部として利用するためかモルタルが1～3cm厚で塗られています。石室石材は表面の平滑な板状の

畿内（大阪府など）に造られた有力者の古墳に採用された横口式石槨という埋葬施設の構造に影響されたと見方がありました。

今回の調査では専門家に現地指導を求め、横口式石槨との比較検討をさらに進めました。その結果、6世紀末から7世紀にかけて大阪府南河内郡河南町に造られた平石古墳群の横口式石槨と構造的共通点が多いこと

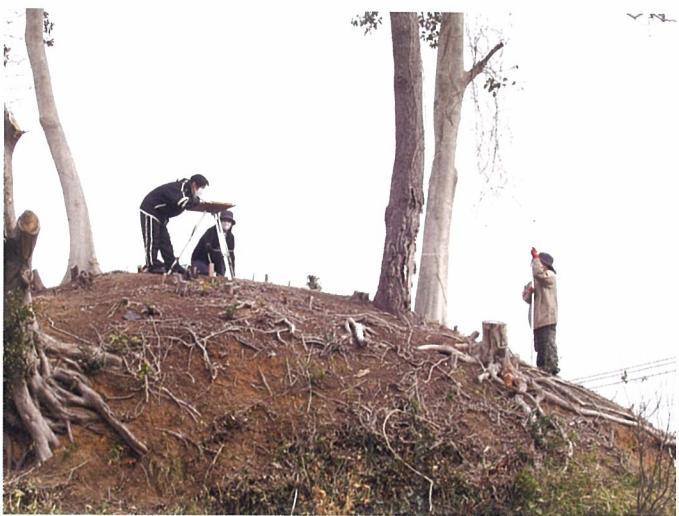


写真3 墳丘測量作業



写真4 手光波切不動古墳（南から）



写真5 手光波切不動古墳石室

3 出土遺物

石室が古くに開口しており、これまで古墳に伴う遺物は全くありませんでした。確認調査では羨道を続く墓道を発見し、思いがけず馬具や土器などが出土しました（写真6）。



写真6 調査状況（南から）



写真7 出土品の取り上げ作業（輪燈）

新のX線CTスキャナを導入したところで、さっそく最新機器による分析調査を依頼できることになりました。

出土品は、輪燈・轡・辻金具・金銅製鞍金具（推定）といった馬具、鍛・鉄刀の破片、木棺に使われた鉄釘・鍵、須恵器・新羅土器、ガラス玉などが出土しました。

輪燈（写真10）

轡に下げ足を踏み掛ける馬具で

慶州博物館に展示されている雁鴨池（新羅の宮廷苑池）出土品に似ています。

辻金具

銅製で薄い造りです。九州歴史資

料館で蛍光X線分析を依頼したところ、銅以外に水銀が検出され、アルガム法（水銀によるメッキ）による金などの装飾が施されていたことがわかりました（写真8）。日本では類例が見当たらず、韓国の国立慶州博物館に展示されている雁鴨池（新羅の宮廷苑池）出土品に似ています。

金銅製鞍金具

20cm×4cmほどの金銅製の薄い板と銅鋤24本です。金銅板は鞍を飾る金具であり鋤はその金具などの縁を

留たものと推定しました。現在も九州歴史資料館で保存処理を継続しています。鐵製で高さ27・1cmあり、完全な形を留めます。X線CTスキャナで撮影すると滑り止めとみられる突起が踏込の内側の縁に並んでいることがわかりました（写真8）。日本では類例が見当たらず、韓国の国立慶州博物館に展示されている雁鴨池（新羅の宮廷苑池）出土品に似ています。

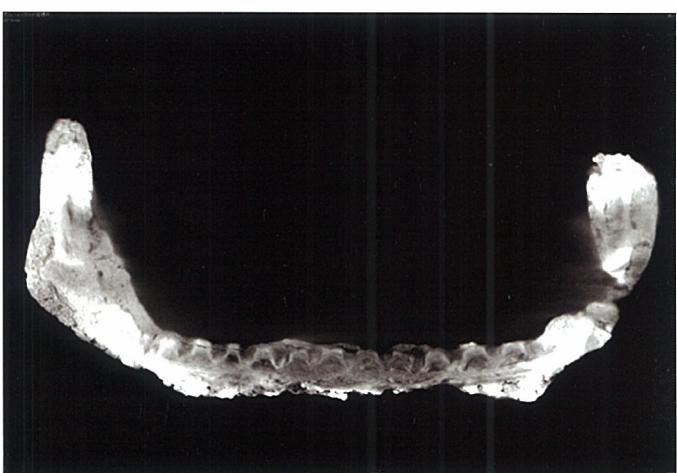


写真8 X線 CT スキャナ画像（輪燈踏込）

います。

須恵器

年代の推定できる高坏があり、6世紀末から7世紀前半と考えられます。壺など載せる器台も出土しました（図5）。この器台は胴に円形の透かし孔が複数ある特殊なもので、沖ノ島祭祀遺跡や本古墳など6例が

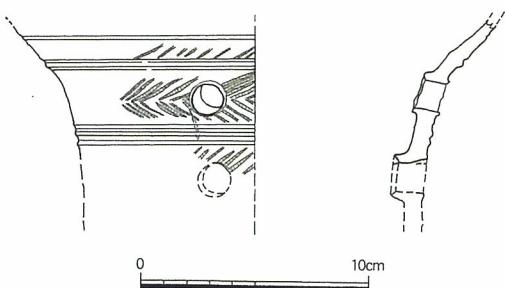


図5 器台の実測図



写真9 新羅土器



写真10 輪鎧

透かし孔が複数ある特殊なもので、宗像地域を中心に分布します。

新羅土器（写真9）

細頸壺と呼ばれる器種の頸付け根

から肩部に向かう部分の破片です。表面に水滴形文と半円点文と呼ばれる印花（スタンプ）文が横方向に連

す。壺など載せる器台も出土しました（図5）。この器台は胴に円形の透かし孔が複数ある特殊なもので、宗像地域を中心に分布します。

冲ノ島祭祀遺跡や本古墳など6例が

代推定を踏まえ、総合的にみて本古墳の築造及び初葬の年代は7世紀前半と考

ました。また7世紀後半とみられる遺物などから追葬が考えら

れます。これまで本古墳は出土遺物

の無い状況においては、宮地嶽古墳

に後続する築造と考えられてきまし

た。これは、全国的な石室小型化の

傾向などに当てはめた解釈でした。

今回、本古墳と宮地嶽古墳の先後

四・おわりに

調査では目的とした墳丘規模の確認には至りませんでしたが、本古墳の位置付けについて一定の成果を提示することができたと思います。

調査中、石室石材の産地鑑定調査も進めました。驚いたことに本古墳の石材が相島産である可能性が出てきました。まだ確定に至っていない

関係について再度考察した結果、從来の見解に反して本古墳は宮地嶽古墳に先行して築造された可能性があると分かりました。

福津市では初の出土です。

畿内古墳との比較や出土遺物の年

代推定を踏まえ、総合的にみて本古

墳の築造及び初葬の年代は7世紀前

半と考

みました。また7世紀後半とみられ

る遺物などから追葬が考えら

れます。これまで本古墳は出土遺物

の無い状況においては、宮地嶽古墳

に後続する築造と考えられてきまし

た。これは、全国的な石室小型化の

傾向などに当てはめた解釈でした。

今回、本古墳と宮地嶽古墳の先後

ため調査を継続しています。岩石鑑定調査は津屋崎古墳群全体を視野にさらに広域で取り組むことにより、例えば古代宗像の範囲や被葬者像の不明な相島積石塚群（新宮町）と宗

像地域の古代人との関わりを考察する等の成果を期待できます。

出土品のうち韓国に類例のある馬具、沖ノ島出土の祭祀土器に似た器台、新羅土器などは今後の研究に広がりをもつ重要遺物です。

今回の調査成果を踏まえ、これら

の調査研究をさらに深めつつ継続していきたいと思います。